

「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」の授業運営に関する検討

伊藤美加

I はじめに

「コミュニケーション演習」の概要

「社会人基礎力」の育成のための初年次教育として、本学（大学・短期大学部）の新入生を対象に、平成22年度から「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」を開講している。この授業では、他者と協調しながら学習に取り組むグループ学習を通して、コミュニケーションスキルの習得を目指す。

本学では平成21年度までは初年次教育として「大学基礎講座Ⅰ・Ⅱ」を開講していた。「大学基礎講座Ⅰ・Ⅱ」では、大学で必要な学習技能の習得と望ましい学習態度の育成を目指していた。しかし平成22年度の改組に伴うカリキュラム改変により、「大学基礎講座Ⅰ・Ⅱ」の学習内容は各学科の専門教育「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」に含めることとなり、代わって、大学だけでなく社会へ出てからより重要となる、コミュニケーション力を身につけさせるための授業科目として、「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」が新設された。なお「大学基礎講座Ⅰ・Ⅱ」の授業内容や授業方法などの改善については、藤田（2002a, b, 2006）、伊藤（2004, 2005, 2007）に詳しい。

「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」の授業の前半では、さまざまなグループエクササイズを通して、他者と協調しながら学習に取り組む練習を行う。その過程で、自分と他者の考えや価値観の違いに気づき、他者という視点を通じた自己理解や自己受容、自己主張の必要性を理解する。そして授業の後半では、特定のテーマに対し、5人前後で構成された班ごとに、そのテーマについて調査し、その成果を発表する。その過程で、様々なアドバイスを教員から得て、演習形式の授業における研究発表のための手続き（発表の仕方や資料の作成の仕方）について、自分たちの活動によって理解する。教員から言われたとおりに課題を作成する、というのが目的ではない。「自分で調べ、考える」ための資料を収集する技術、資料を読む技術を応用し、標準的な研究発表の形式に慣れることが目的である。演

習形式の授業のためのトレーニングという位置づけでもある。

本稿では、平成23年度に開講した「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」の授業における取組について紹介し、その成果を報告した上で、今後の授業運営について論じることとする。

II 「コミュニケーション演習Ⅰ」の取組

「コミュニケーション演習Ⅰ」（前期・2単位）の15回分の授業計画をTable 1に示す。

第0講

初回（第0講）の「全体オリエンテーション」の授業目標は、(a) この授業の学習目標・内容を理解する、(b) 授業の運営方針を把握し、受講するかどうか意志決定する、の2点である。グループによる協調学習を必須としていること、それゆえ自主的に積極的に参加することが求められていること、そしてそのために、成績評価は出席と活動それ自体を重視することを強調する。例えば、毎回、積極的に出席しなければ、他の班員に迷惑をかける可能性がある。やむを得ず授業を休む場合でも、必ず班員の誰かに連絡を取るようすることや、誰にも連絡を取らずに無断欠席するのは迷惑であると同時に、無責任であることを例示する。休んだ回の内容や課題などは、次の授業までに誰かに教えてもらって、自分でフォローしてから、次の回の授業に臨む必要があることをも伝える。

社会に出てから一人でできることは限られていて、通常はプロジェクト等、複数名がグループになって作業することがほとんどである。その際に、「知らない人と一緒にやりたくない」と言い訳はできない。「人見知りだから不安だ」「誰かに迷惑をかけそうで自信がない」と思っている人こそ、今までの自分を変えるためにも是非受講してほしいと願っていることを伝える。大学は社会へ出るための準備をするところ。大学で学ぶために必要なスキルは、社会へ出てからも必要

Table 1. 前期科目「コミュニケーション演習Ⅰ」の授業計画

1	2011/4/14	第0講	全体オリエンテーション
2	2011/4/21	第1講	グループエクササイズ1：自己紹介と協力ゲーム
3	2011/4/28	第2講	グループエクササイズ2：グループ・ディスカッション
4	2011/5/12	第3講	グループエクササイズ3：図書館散策
5	2011/5/19	第4講	班活動1：発表テーマを考える
6	2011/5/26	第5講	班活動2：資料収集・中間発表
7	2011/6/2	第6講	班活動3：レジュメの作成
8	2011/6/9	第7講	班活動4：スライドの作成
9	2011/6/16	第8講	班活動5：発表の仕方・印刷の仕方
10	2011/6/23	第9講	班活動6：発表の練習
11	2011/6/30	第10講	班発表1
12	2011/7/7	第11講	班発表2
13	2011/7/14	第12講	班活動7：班発表の反省
14	2011/7/21	第13講	課題日（質問日）
15	2011/7/28	第14講	総括

なスキルなので、グループによる活動を通してコミュニケーションスキルを身につけてもらいたいと説明する。

なおグループは、教員が受講生の学科をシャッフルして機械的に振り分ける。すなわち、クラス分けの方法は、学科別の名簿記載順に、A, B, C, D, E, A, B, C…というように、ローテーションでクラスを割り付ける。結果として、各クラスには、各学科の学生がほぼ均等に割り振られることになる。更にAクラスの中で、1～6の数字を順に割り付けて班分けをする。これで、最終的にはほぼ学科がバラバラの班が構成される。同じ学科の学生でも、かなり学生番号の離れた者同士が班員になる。すなわち、最終的な5人前後の班員は、ほぼ見知らぬ者同士、という構成になることが授業運営上望ましい。

第1講

第1講の授業目標は、(a)各班のメンバーと知り合う。すなわち、新しい人間関係を作り上げることと、友達を増やすことである。そして(b)各班で協力しながら問題を解決することを経験する。協力とは、目的達成のために2人以上の人が力を合わせる。この「力を合わせる」ことの意味、大切さ、有用さ、難しさ、日常活動での問題点などについて学ぶ。班での自分の働き、他人の動き、そしてその動きが他のメンバーや班全体にどのような影響を及ぼすかに気付くこ

とを目指す。

そのためのエクササイズとして、「自己紹介」と「協力ゲーム」を行う。「自己紹介」では、班のメンバーに順に自己紹介をしながら、班のメンバーの名前や愛称、学科をメモして憶える。その際、指示に従って、特定の話題について話すようにする。話す人は、なぜそうなのか、その話題に関することをいろいろ話すようにする。例えば、話題シートの最初の例「どんなスポーツが好きですか」なら、どのスポーツが好きかだけでなく、どのチームが好きか、どの選手がお気に入りなのか、なぜ好きなのか、自分でそのスポーツをやっているのかどうか等、話題に関わることなら何でもよいとする。目安は一人1分である。

「協力ゲーム」は、メンバー間の意思疎通や友好的な雰囲気づくりを目的とし、お互いの協力関係を形成・強化するもの（諏訪，2000，pp.97-102）。はがき大の用紙を各自が適当に破りながら、それぞれ5枚の紙切れをつくり、合図とともに、班員はそれぞれ紙切れを交換しながら、元のカードを再現する。その際、他の誰かに適当に自分の紙切れを渡すだけではうまくいかない。相手が何を必要としているのかを判断しながら、自分を含めた全体をよく見通すことが大切である。このゲームを通して、協力するための条件や、うまく協力するために必要なことを学ぶことになる。

第2講

第2講の授業目標は、(a) 討論の意義を理解すること。討論の練習課題を通して、自分や仲間のもの見方・考え方がさまざまに異なることを知るとともに、班のメンバー全員が合意することの難しさ・大切さを体験的に学ぶ。その際に (b) 討論の基本ルールを学ぶこと。今後の班活動において話し合いを活発に進めていくために、基本となるルールを学ぶ。お互いが気持ちよく話し合いをするために必要なことを確認させる。「何をしてはいけないのか」「どのようなことが望ましいのか」を理解する。

そのためのエクササイズとして、ある物語を読んで、その登場人物の中で責任が重い順序を決める課題を行う。まずは個人で解答を考え、次に班のメンバー全員が納得する結論を導く。

別の課題として「月世界／月で遭難したら」では、月面に不時着した宇宙飛行士となって、母船にたどりつくまでに必要なものの順位を考える (Doyle & Straus, 1976; 國分, 1996)。個人で解答を考えた後、①納得できるまで話し合い、安易な妥協はしない、②話し合いは勝ち負けではない、③多数決や平均値は用いない、④少数意見にも十分耳を傾けることに注意を払いながら、グループの順位を決定する。その後、NASAの専門家による順位と、自分の順位・グループで決定した順位との差を算出して、「誤差」を算出する。グループの順位との誤差の方が自分の順位との誤差よりも小さい、すなわち「グループで協力して導き出す結論は、それぞれ個人が考える方法の平均値を上回る」と言えるか、確かめてみる。

これらの活動を通して、グループで何かを話し合っで決める、合意することの難しさやその過程の大切さを、体験的に学ぶ。自分の考えを大切にしながら、できるかぎりグループの全員が納得のいく方法で、グループとしての合意・意思決定をつくりあげるのが目的である。

これらの活動から期待できることは、「人それぞれ、考え方が異なる」=だからこそ、複数の人間で討論する意味がある、ということを経験してもらうこと。また、討論の際の2つのハードル「自分の考え・立場を容易に変えることができない」「他人の考え・立場を変えよう説得することの難しさ」について気づくこと。このことを通じて、「他人の意見を注意深く聞い

たり、反論したり、自分の意見を論理的に述べる」ことの重要性を認識すると考えられる。

これらの課題に「正解」「正答」はない。唯一正しい正解・正答がある問題ばかりではない。答えを見つけることではなく、お互いに意見を交換することの価値に気づくことこそが重要である。

第4講

第4講の授業目標は、(a) 多様なアイデアを出す方法について学ぶ。できるだけいろいろなアイデアを出すという活動(ブレインストーミングとマインド・マップ)を行い、知識や視点を共有し、全体の知識や視点を豊かなものにする過程を体験する。更に、豊かになった知識や視点を前提として、(b) 複数のアイデアの中から、ある共通する価値により、1つを選ぶ過程を体験する。

ブレインストーミングは、「誰かが考えるから自分は考えなくてもいい」という手抜きや、「あまり他の人と異なる意見を言わないほうがいい」という遠慮による話し合いの質の低下を防ぐことを目的とした、集団思考スキルである。アイデアの量が増えれば、話し合いの質も高まるという基本的な考え方に基づいて、①思いついたものはどんなアイデアでもOK、②他の人の発言を批判しない、③「たくさん」思いつくことをよしとするというルールのもとに行う(樋口, 2003, p.19)。

例えば「遅刻したときの言い訳」について、どんなアイデアでもよいので、それぞれ思いついたアイデアをどんどん提案し、紙に書き出すことでアイデアを共有する。そしてその中から最も興味深いと考えられるものを一つ選び、なぜその言い訳が興味深いのか、理由も述べながら発表する。自分のアイデアを表現する際に、他のメンバーが理解できるように、何らかの根拠を示して説明すること、他の人のアイデアに興味を持って意見を言うことを強調した。

マインド・マップとは、脳内に放射状に広がるさまざまな思考を、自由に枝を伸ばして描き込んでいく発想法で、心の地図あるいは脳の地図である (Buzan & Buzan, 1993)。具体的な手順は、まず、特定のテーマを中央イメージとして最も印象的な形で書く。次に、中央イメージから放射状に10本の太い枝を書く。この枝のそれぞれに、テーマに関係する情報やテーマか

ら連想される事柄を書く。そしてこの太い枝からさらに何本もの細い枝を伸ばし、連想を連想でふくらませる。その際、最初に頭に浮かんだ言葉を書くこと、作業はスピーディに行うことに注意する。

例えば「京都」をテーマにマインド・マップを作成し、「京都はどんな特色を持つ都市であるか」をまとめて、話し合いの結果を発表する。

その後、班発表の概要について説明を行った。班発表の課題は「もっともっと京都！」で、「京都をもっともっとすばらしくするためにはどうしたらいいか」を発表してもらったこととした。京都の大学に通っている、あるいは、京都に住んでいる人をターゲットにして、どのような情報を提示したらいいか、自分自身が実際に感じている、京都の問題点や改善点、自分が住んでみて・京都の大学に通ってみてこうだったらよかったのと思うことなどを考える。あるいは京都ならではのよいところから、もっとよくするにはどうしたらいいか、と連想しよう、と説明した。また、なぜそう思うのか、自分の考えや意見を裏付ける理由や根拠も考えるように指導した。

第5講

第5講では、班発表のときに、どんなテーマで発表することにするのか、具体的なイメージについて話し合い、今後の計画について大まかに見通しを立てることを目標とした。また中間発表として、各班で「具体的にどんなテーマで発表する予定か」を発表してもらった。他の班の発表予定テーマを聞いて、自分たちのテーマについて見直してみる機会とした。同じ様なテーマの班が多ければ、自分たちの発表内容が陳腐(ありきたり)な印象を持たれてしまうことに注意を促した。

その後、班発表の形式の説明を行った。班発表は、二回の授業に分けて行い、全員が教室の前(教壇)に出て発表をする。発表の際には、必ずレジュメなどの資料を作成し、それに基づいた発表を行う。一班の持ち時間は20分間で、発表15分と質疑応答5分である。そして班の成果に対する成績評価は、レジュメなどの資料及び発表内容に対してのものと、発表の仕方そのものに対してのものに分かれる。

第5講以降、班発表の準備を進めるにあたり、授業開始時と、教員が指定する授業終了前の時刻以外は、

教室外に出かけて発表のための資料収集をすることができるとした。PC利用は、情報教育センターの情報処理実習室を利用するようにした(オープン利用コーナーでは他の利用者の迷惑になるため。図書館内のPCは館内資料検索のみに利用)。

すべてのクラスで「京都」をテーマに班活動を行うため、本大学の図書館にある京都関係の資料は、すぐに貸し出し中になってしまったり、他の班が集めた資料と同じものになったりする、すなわち独創性に欠けるものである可能性がある。よって資料収集の方法も、班独自で役割分担をしながら工夫する必要があると注意を促した。

第6講

第6講では、班発表のときに配布する資料=レジュメの作り方について理解することを授業目標とした。この授業だけでなく、今後、他の授業でレジュメを作成する場合も想定して、用紙サイズと枚数、書式面で必要な情報(授業名や発表年月日、タイトル、発表者等)説明した。内容面では「事実」を提示して「意見」(自分たちの考え)を述べることを求められていることを強調した。具体的には、「京都の問題と思える点や改善すべき点(事実)」の紹介と、「それがなぜ問題なのか」「それらの問題によってわれわれはどのような影響を受けているのか」「それらの問題を改善することによってどのようなことが期待されるのか」など、自分たちの意見をバランスよく取り込むよう指導した。

例えば、自分たちが問題だと思っている点は紹介しているものの、列挙に終わっているものは悪い例。なぜ問題と思えるのか、どう改善すべきなのかが分からない。その問題を解決する提案がなければ、発表の聴き手に対して、何を伝えたいのか(メッセージ)が不明だからである。あるいは、伝えたい気持ちばかり強調され、どうしてそのように考えるのかの根拠(事実)が示されていないものも悪い例と示した。

レジュメなどの資料は、読んでもらえなければ意味がない。また、読んでも意味が分からないのは困る。口頭で説明を加えるのが前提でも、時間が経ってから読み返すこともあるので、最低限の説明的記述は載せておかななくてはならない。よって、読む気にさせるよう、分かりやすく、見やすいレジュメを目指し、文字

のサイズ、一行あたり文字数、1ページあたり行数、余白、行間、見出し、図や表などの活用を工夫するよう説明した（詳しくは、藤田（2006））。

第7講

第7講では、班発表のときに提示する資料＝スライドの作り方について理解することを授業目標とした。この授業の発表では、パソコンやプロジェクター、OHPなどの、特別な機器を必要とするものの使用は任意としたが、プレゼンテーションツールを使用することによるメリットは大きいし、特にPower Pointの有用性は高いため、より美しくわかりやすい発表をするためにも積極的に活用してほしい、と説明した。

ただし、発表で一番重要なのは発表する内容と発表者の熱意。内容が有意義で印象深いものでない限り、Power Pointを使おうと何を使おうと、聴き手に感銘を与えることはできない。内容が伴わなければ、聴衆の心を動かすような発表はできないとした。次に発表で重要になるのが、発表の仕方。伝えたいことを論理的に、わかりやすい順序で、適切な図や表を使って発表すること。Power Pointはそのための強力な道具（ツール）にすぎないことを強調した。

第8講

第8講では、班発表に向けて、発表資料を仕上げ、資料の印刷の仕方を理解する。また本学で学生が利用することができる印刷室の利用方法やマナーを知る。実際に班の代表者各一名を印刷室へ引率して、印刷機の使い方の実演説明をした。印刷機とコピー機との違い、印刷機での縮小印刷や両面印刷について確認した。

第9講

第9講では、(a)発表にあたって注意すべきことを説明し、その上で(b)発表の練習をすることを目標とした。

「授業内での発表」であるため、単に「人前で上手に話す」というだけでなく、「自分が学習してきた成果を聴き手に的確に伝える」ことを念頭におき、発表内容および発表の仕方を確認した。例えば、①原稿をそのまま読まない。すなわち配布したレジユメの「棒読み」にならないようにする。書かれていることを読み上げるだけなら、「発表」は要らない。資料を配布

して「後は読んでおいてください」としてもよいはずだ。かといって、レジユメを無視した発表では、今、何を説明しているのか、聴く側がついてこれられない。適切なアレンジが必要である。②ゆっくり説明する。聴く人は、一度に込みいったことを言われても理解できない。短い文を使うよう心掛ける。音が聞き取りにくい単語は言い換えて補ったり、重要なことや分かりにくい箇所は繰り返し説明したりする工夫も大切である。③聴いている人の顔を見る。1人3秒とか、1人1文という基準で見つめる、あるいは、できるだけ全員を見るように、教室全体に視線を動かすなど試してみる。④無駄な動きをしない。緊張すると、どうしても手に持っているものや身体の一部を触ったりして無駄な動きをしてしまいがちだ。本人は全く気づいていないので注意が必要で、発表の練習の際にお互い指摘しあうとよいこと等を例示した。

第15講

最終回では、班活動・班発表の反省を踏まえて、半期授業全体を振り返り総括を行った。①知らない学生と、共同作業をする、②自分（たち）のいいたいことを、文章にまとめる、③発表のための資料（レジユメ）を工夫して、聞き手を意識しながら作成する、④実際に人前で発表する。これらのことは、経験する前には「本当に自分にできるのかなあ」と不安に思うことが多かっただろうが、実際にやってみれば、それほど大きな障害にはならなかったはず。この授業だけでなく、大学生活を充実させるもしないも、実際にやってみるという「積極性」にかかっている。能力の差が初めからあるわけではなく、ちょっとした機会に積極的に経験を積み、人間関係や自分の行動範囲を広げることが、結果として能力差となる。今後とも何事にも積極的に取り組んでほしいことを伝えて、まとめとした。

Ⅲ 「コミュニケーション演習Ⅱ」の取組

「コミュニケーション演習Ⅱ」（後期・2単位）の15回分の授業計画をTable 2に示す。

授業の学習目標・内容や、授業の運営方針は、前期「コミュニケーション演習Ⅰ」と同様である。前半では、前期科目と同様に、グループ・ディスカッションを通して、新しい人間関係を作り上げ、様々な討論の方法

Table 2. 後期科目「コミュニケーション演習Ⅱ」の授業計画

1	2011/9/22	第0講	全体オリエンテーション
2	2011/9/29	第1講	クラス別オリエンテーション：自己紹介と価値交流学習
3	2011/10/6	第2講	グループ・ディスカッション1：問題解決
4	2011/10/13	第3講	グループ・ディスカッション2：ディベート
5	2011/10/20	第4講	班活動1：テーマ決定・資料収集
6	2011/10/27	第5講	班活動2：資料収集・中間発表
7	2011/11/10	第6講	班活動3：発表に向けて準備1
8	2011/11/17	第7講	班活動4：発表に向けて準備2
9	2011/11/24	第8講	班活動5：発表に向けて準備3
10	2011/12/1	第9講	班活動6：発表に向けて準備4
11	2011/12/8	第10講	班発表1
12	2011/12/15	第11講	班発表2
13	2011/12/22	第12講	班発表3
14	2012/1/12	第13講	班活動7：班発表の反省
15	2012/1/19	第14講	総括

を経験する。

第1講の「価値交流学習」では、自分の価値観を大切にしつつ、同時に相手の価値観も尊重するという意味での受容を学ぶ（諏訪，2000，pp.82-87）。お互いの価値観を理解し合う過程を通して、相手があるがままに受け止めるよう努める。

第2講の「問題解決」では、自分が持っている情報を交換して課題を解決するという活動を行う（星野，2002）。全員参加による話し合いにより問題解決を行うことを通して、一人ひとりの存在の重要性に気付く。

第3講の「ディベート」では、メリットとデメリットとを比較しながら、議論をする（安藤・田所，2002；樋口，2003）。ディベート・ゲームを通して、意見の対立を解消する方法としての議論がどのようなものであるかを学ぶ。

一方後半では、「1班で1シンポジウムを実施することとし、討論したいテーマ・問題を決め、どのようなシンポジウムを行ったらよいかを考えた。聴衆は受講生すなわち一般の女子大生。みんなが興味・関心を持つテーマ・問題について、どのような情報を提示したらよいか重要であること、ただ調べたことだけを報告するのではなく、みんなと一緒に考えてみたいテーマ・問題を選び、そのテーマ・問題についての、自分の考え・意見を説明・納得させる必要があることを強調した。そのためには自分の考えや意見を裏付ける理由や根拠を提示しなくてはならないことに注意を

促した。例えば、提案型のシンポジウムでは、冬期休暇中の旅行について、各班員がそれぞれの考えを提示する。あるいは、ディベート型のシンポジウムでは、賛否両論ある問題について、各班員が賛成意見あるいは反対意見を述べて議論することを例示した。

IV 授業への取り組み方に対する自己評価に関する分析

「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」の学科別受講生数を Table 3 に示す。

「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」のほぼ毎回の授業後に、受講生はその日の授業を振り返って、授業への取り組み方に対する自己評価を行った。最終回の授業では、半期の授業を振り返って自己評価を行った。質問項目は次の通り。1：活動に参加できましたか？

2：活動を楽しむことができましたか？ 3：グループでの話し合いに参加できましたか？ 4：自分の気

Table 3. 前期科目と後期科目における学科別受講生数

2011	前期	後期
キャリア形成学科	83	82
文学科	31	13
心理学科	14	7
健康栄養学科	5	29
短大部	12	3
合計	145	134

持ちや意見を伝えることができましたか？ 5：他者の気持ちや意見を聴くことができましたか？ それぞれの質問について、「できなかった=1」, 「少しできなかった=2」, 「ふつう=3」, 「まあまあできた=4」, 「できた=5」として、5段階で評価を行った。更に、今日の授業の総合評価も同様に5段階で評価した。

以下、「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」におけるそれぞれの授業回で、受講生の自己評価がどのように変化したのか、特定のクラスの結果を示す。また最終的に、授業全体を通して、受講生はどのように自己評価したのか、全クラスの結果を示す。

1. 「コミュニケーション演習Ⅰ」受講中

前期「コミュニケーション演習Ⅰ」に対する、特定クラスの受講生（27名）による各授業回の、総合評価に対する自己評価を Figure 1 に示す。

どの授業回も自己評価は概して高い。第1講は初めてグループのメンバーと会う授業回なので、思った以上に話せた、打ち解けて話すことができたことにより、特に自己評価が高い。第2講は一定の結論を出さなければならないグループ討論を初めて行う授業回のため、結論を最終的に出せなかったり、結論を出すまでの過程で十分討論をすることができなかったりと、班によっては自己評価が低くなってしまっている。第4

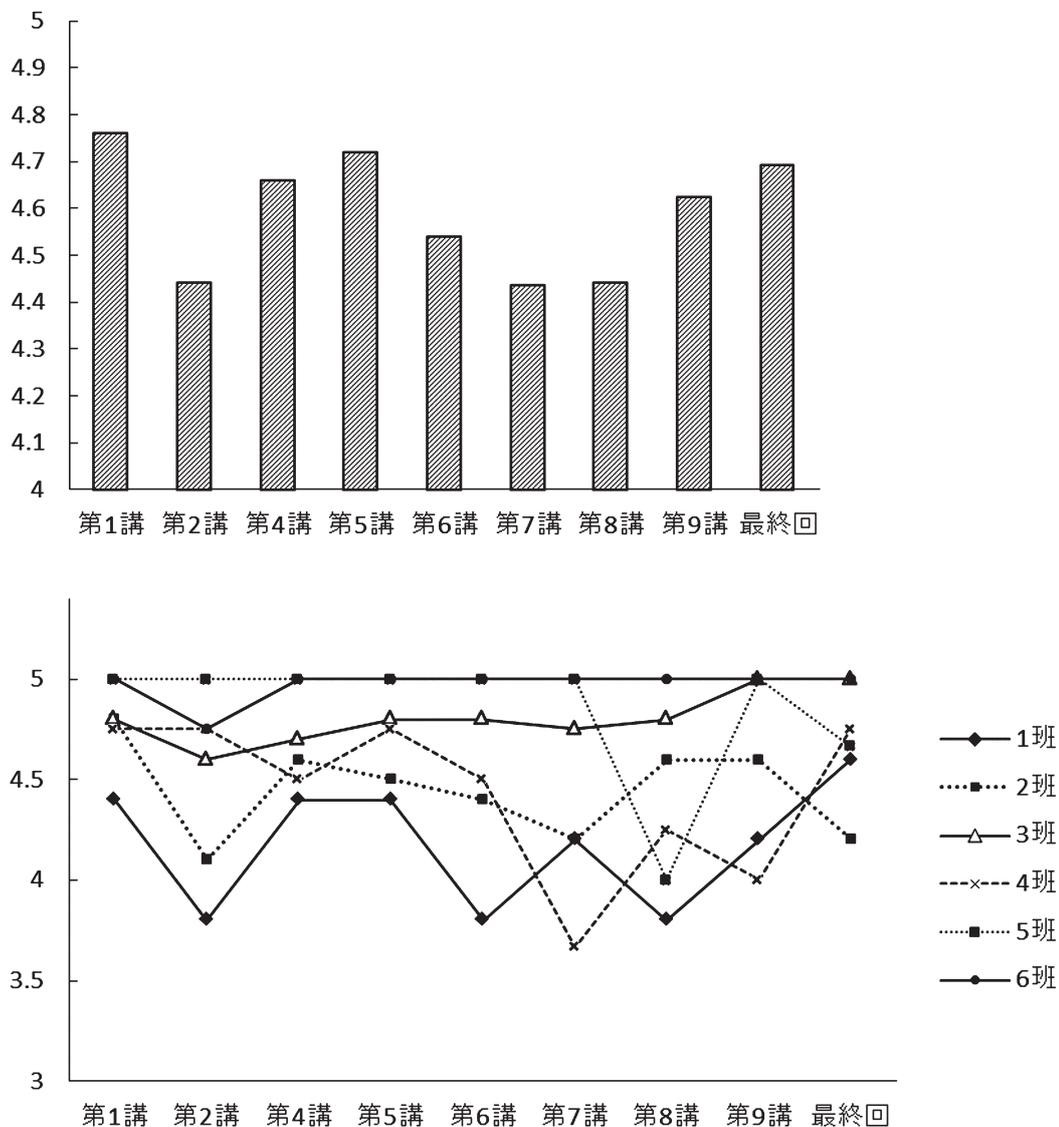


Figure 1. 前期科目における受講生による自己評価の評定平均値（特定クラスの平均）の変化：上段はクラス全体、下段は班別
 (注：「できなかった=1」, 「少しできなかった=2」, 「ふつう=3」, 「まあまあできた=4」, 「できた=5」の5段階評定)

講以降は班発表の課題の説明があり、班活動が本格的に始まることで、自己評価が再度高くなっている。ただ、班発表の作業が思うように進まなかったり、班における役割分担がうまくいかなかったりと、自己評価が段階的に低くなっている。班発表を控えた第9講では、発表の練習をすることで発表の見通しができ自信がついたのか、自己評価が再度高くなっている。そして最終回では、班発表における達成感からか自己評価が高いままになっている。

2. 「コミュニケーション演習Ⅱ」受講中

後期「コミュニケーション演習Ⅱ」に対する、特定

クラスの受講生（26名）による各授業回の自己評価を Figure 2 に示す。

グループ討論の初回にあたる第2講で自己評価が低くなる、発表に向けての準備の授業回で段階的に自己評価が低くなるという点において、前期「コミュニケーション演習Ⅰ」に対する各授業回の自己評価と同様のパターンを示す。しかし前期科目の場合と異なるのは、班活動後半および最終回における班別の自己評価の変化（Figure 2 の下段）で、班による差異が顕著になっている。

後期「コミュニケーション演習Ⅱ」後半は「1班1シンポジウムを企画する」として、発表の内容だけで

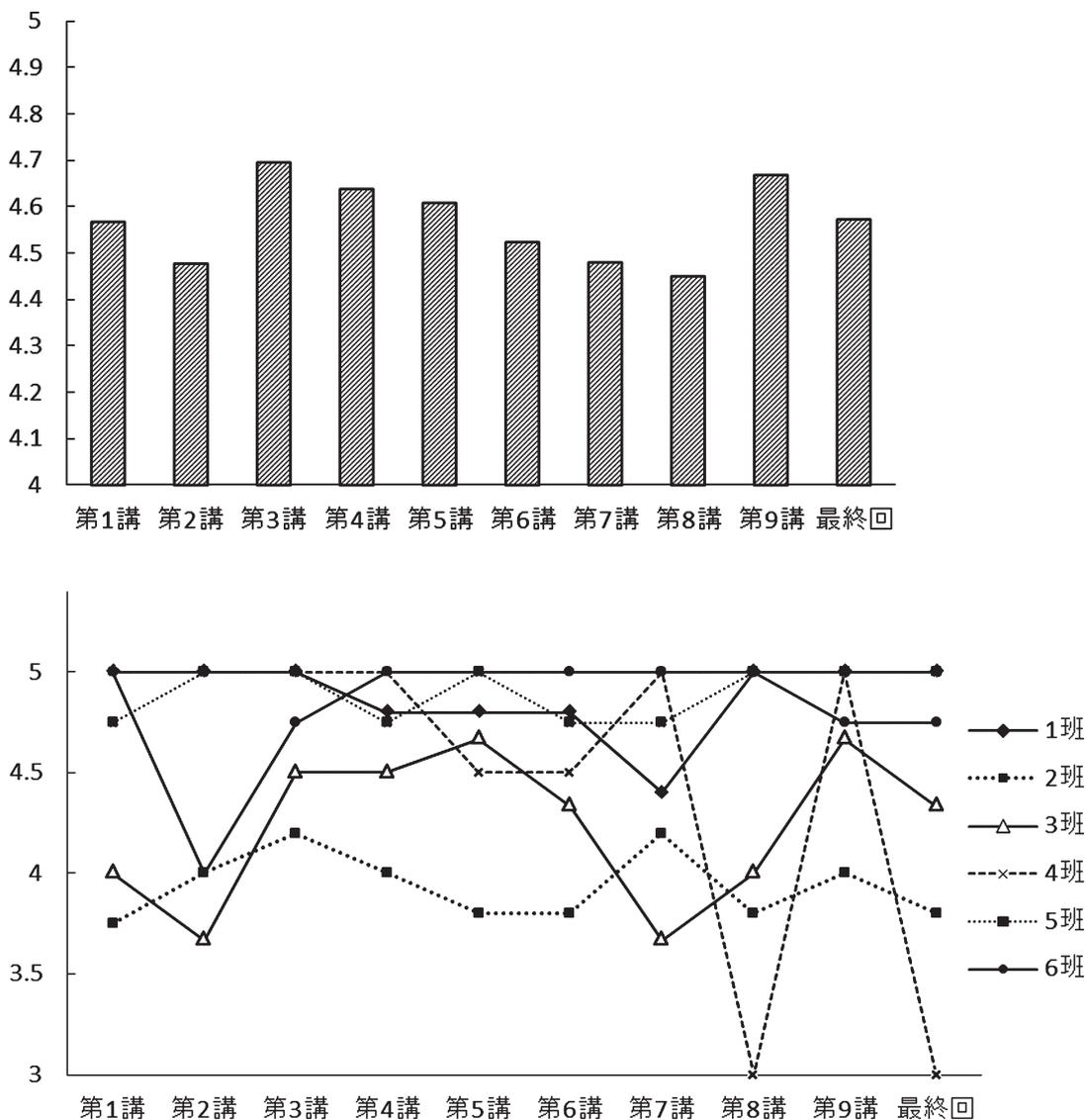


Figure 2. 後期科目における受講生による自己評価の評定平均値（特定クラスの平均）の変化：上段はクラス全体、下段は班別
 (注：「できなかった= 1」, 「少しできなかった= 2」, 「ふつう= 3」, 「まあまあできた= 4」, 「できた= 5」の5段階評定)

なく発表の方法にまで、討論による班の決定の自由を認めた。すなわち班の自主性が求められたことになる。発表の枠組みを広げ班の自由度を上げることは一方で選択肢が増えることにもなり、班によっては決めなければならないことが多すぎてなかなか決められないという場合もあったようだ。班活動が順調に進む班と、途中で滞り後退せざるを得ない班との違いが現れてしまったのであろう。

3. 「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」受講後

最終回の授業では、その日の授業ではなく半期の授業を振り返って、受講生は自己評価を行った。前期「コミュニケーション演習Ⅰ」と後期「コミュニケーション演習Ⅱ」における、全クラスの受講生による自己評価を Figure 3 に示す。

質問項目別の自己評価の評定値について、科目2(前期、後期)×質問項目6の2要因分散分析を行った結果、質問項目の主効果のみが有意になった($F(5,1140) = 6.07, p < .01$)。Ryan法による多重比較を行ったところ、有意差が認められたのは、質問項目1と4および質問項目4と5のみであった。

前期科目でも後期科目でも、質問項目4：自分の気持ちや意見を伝えることができましたか？が、質問項目1：活動に参加できましたか？や質問項目5：他者の気持ちや意見を聴くことができましたか？よりも有意に低かった。活動の中で自己理解や他者理解は

よくできたものの、それに比べて自己表現・自己主張がよくできなかったと評価していることを示す。

確かに、最終回の感想用紙には、仲良くなれて良かったという肯定的な感想と共に、グループ討論で他者と異なる考えを言い出せないままに終わってしまったり、納得できないのにそれを言い出せずに妥協してしまったり、思っていることを思った通りに表現することができなかつたりといった否定的な感想も少数ではあるがあった。相手を尊重しながら言うべきことを適切にその場にふさわしい方法で述べるという自己表現・自己主張のためのエクササイズを前半の授業回に入れトレーニングを行うといった改善が必要と考えられる。

V コミュニケーションスキル尺度の評定に関する分析

平成23年度「コミュニケーション演習Ⅰ」の初回と最終回の授業で、「コミュニケーションスキル」に関する尺度項目を受講生に評定させた。尺度項目を Table 4 に示す。それぞれの質問について、「まったくあてはまらない=1」、「あてはまらない=2」、「どちらともいえない=3」、「あてはまる=2」、「とてもよくあてはまる=1」として、5段階で評価を行った。なお、初回と最終回の両方ともに出席をした受講生116名を分析対象とした。

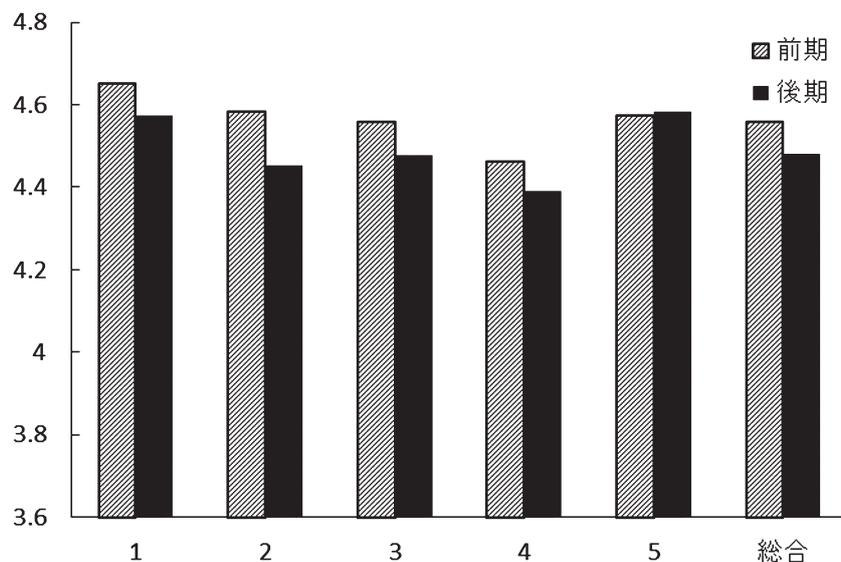


Figure 3. 前期科目と後期科目の最終回に実施した、受講生による自己評価の評定平均値(全クラスの平均)
(注:「できなかった=1」、「少しできなかった=2」、「ふつう=3」、「まあまあできた=4」、「できた=5」の5段階評定)

Table 4. コミュニケーションスキル尺度項目

傾聴力	丁寧な聴く力	話し手に注意を向けて聴くことができる
		うなずきやあいづちをしながら聴くことができる
		話し手が話し終わるまで口を挟まずに聴くことができる
		相手の話を素直に聴くことができる
		内容の確認や質問等を行いながら、相手の話を聴くことができる
		まじめな態度で熱心に、相手の話を聴くことができる
表現力	わかりやすく伝える力	自分の考えや気持ちを話すことができる
		自分の考えや気持ちを話すときに、その理由や根拠を説明できる
		わかりやすく伝えようと心がけている
		聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる
		話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
理解力	意見の違いや立場の違いを理解する力	自分の特徴（長所や短所など）を知っている
		自分に対して自信がもてる
		他者の特徴（長所や短所など）を理解できる
		他者の意見を共感を持って受け入れることができる
		他者の立場に立って考えることができる
		自分と他者との共通点や違い（性格や特徴など）を理解できる
		他者の顔の表情の違いに気づける
		他者の身振りやジェスチャーの意味が分かる
他者の気持ちを察することができる		
関係力	自分と他者との関係性を調整する力	話し合いでテーマに見合った発言ができる
		話し合いでさまざまな意見を出せる
		話し合いで一定の結論を出せる
		自分の知りたいことを相手に質問できる
		質問された内容にあった回答ができる
		自分の感情をコントロールできる
		相手の気持ちに合わせた言い方や行動がとれる
その他		場の雰囲気を感じる事ができる
		声の大きさを調整できる

「コミュニケーション演習Ⅰ」受講前後

「コミュニケーションスキル」に関する尺度項目のうち、傾聴力：丁寧な聴く力、表現力：わかりやすく伝える力、理解力：意見の違いや立場の違いを理解する力、関係力：自分と他者との関係性を調整する力の、下位尺度別の受講生による評定を Figure 4 に示す。

下位尺度別の評定値について、受講前後2（受講前、受講後）×下位尺度4（傾聴力、表現力、理解力、関係力）の2要因分散分析を行った。その結果、受講前後の主効果（ $F(1,115) = 33.67, p < .01$ ）、下位尺度の主効果が有意になった（ $F(3,345) = 62.67, p < .01$ ）。また、交互作用が有意になったので（ $F(3,345) = 9.34, p < .01$ ）、下位検定をおこなったところ、全ての下位

尺度において受講前後の単純主効果が有意になった（順に、 $F(1,460) = 6.82, 50.53, 14.41, 31.94$ 、全て $p < .01$ ）。また、受講前後とも下位尺度の単純主効果が有意になったので（順に、 $F(3,690) = 67.02, 27.28$ ）、Ryan 法による多重比較を行ったところ、受講前では、表現力と関係力とで有意差が認められなかったが、それ以外の下位尺度間では有意差が認められた。受講後では、傾聴力と表現力・理解力・関係力のいずれとで有意差が認められたが、表現力・理解力・関係力間では有意差が認められなかった。

いずれの下位尺度においても、受講前よりも受講後の方が有意に評定値が高くなったことから、「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」を受講することによって、

コミュニケーションスキルが向上したことを示す。

「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」の受講による効果として、コミュニケーションスキル尺度の下位尺度別に、受講後の評定値から受講前の評定値の差を算出したものを Figure 5 に示す。コミュニケーションスキルのうち、表現力や関係力が傾聴力や理解力と比べて向上したことを示す。

討論の仕方、発表の準備の進め方、資料の検索方法、レジュメやスライドの作り方、そして発表の仕方について、実際に体験しながら習得してもらってきた。こうした学習スキルの習得をグループによる学習を通じて行ったのは、他者と協同して学ぶことでコミュニケーションスキルを向上させるため、ひいては、自己理解・他者理解を促し、自己肯定感を高めるためであった。自分とは異なる他者と自由に話すことの楽しさや、他者と討論して自分の意見を表現することの意味などを学び、他者に教え教えられながら、班発表という最終目標まで到達する。こうして得られた達成感や充実

Ⅵ まとめ

「コミュニケーション演習Ⅰ・Ⅱ」では、グループ

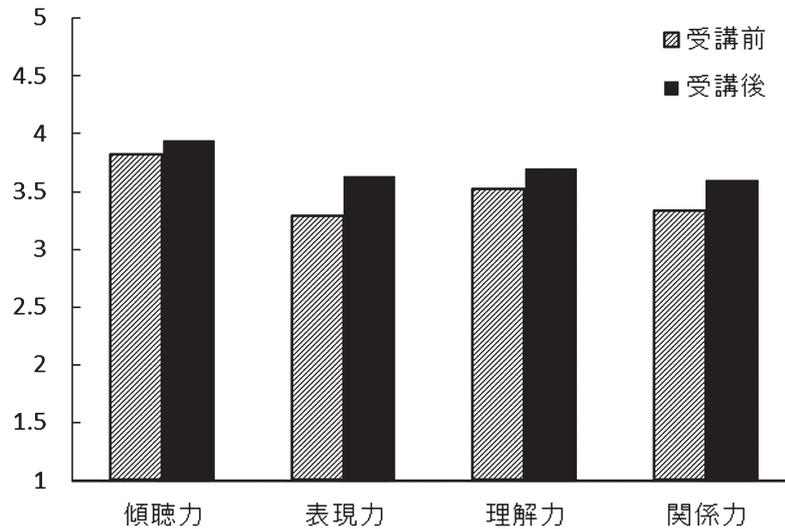


Figure 4. 前期科目の初回授業時（受講前）と最終回授業時（受講後）に実施した、コミュニケーションスキル尺度の下位尺度別の平均評定値（全クラスの平均）

(注：まったくあてはまらない=1, 「あてはまらない=2, 「どちらともいえない=3, 「あてはまる=2, 「とてもよくあてはまる=1」の5段階評価)

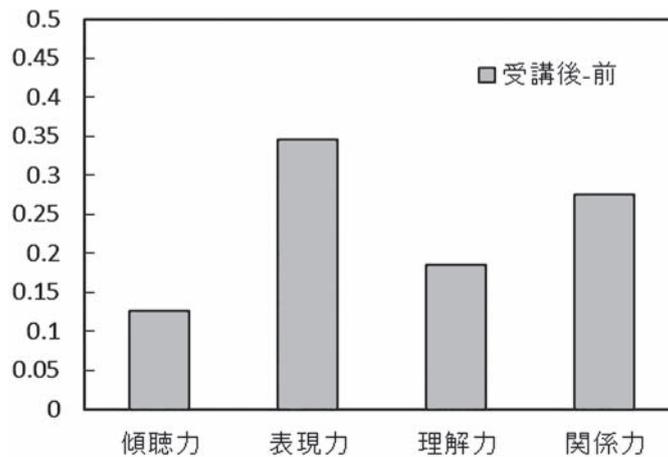


Figure 5. 前期科目の初回授業時（受講前）と最終回授業時（受講後）に実施した、コミュニケーションスキル尺度の下位尺度別の平均評定値の差（全クラスの平均）

感、大変だったけれどやって良かったと思う経験が大事であって、このようなことをたくさん積み重ねることが肯定的な自己評価につながる。途中であきらめずに最後まで頑張ることができたことやそこから得たことが、自己肯定感を支えるのである（Appendix 1を参照）。

一方で、グループ学習はさまざまな授業科目で取り入れられ、学生にしてみれば「またか」と、新鮮味や面白みが薄れて陳腐化してしまっている傾向がある。集まってお互い幾分気兼ねしながら楽しそうには話すけれど表面的な討論で終わり、議論が深まっていかないという問題もある。

グループ学習が協同学習ではない（杉江，2011）。グループにしておけば協調的な学びが自然にうまれるわけではない。表面的な討論で終わらせないためには、討論の目的を明確に設定し、協同学習に必要なスキルとして、コミュニケーションスキルの個別トレーニングを適切に入れるのが望ましい。例えば、自己表現・自己主張のエクササイズは、授業への取り組み方に対する受講生の自己評価で、「自分の気持ちや意見を伝えることができましたか」という項目が他の項目に比べて低かったことから、特に有効であろう。

議論が深まっていかない原因の一つに、学習課題の設定がある。その場限り、発表のための発表になってしまっ、発表で提案したことが次につながるわけではない。例えば前期科目「コミュニケーション演習Ⅰ」では、京都をもっとよくするための提案を班発表してもらったが、実際にその提案を学外へ発信することはなかった。よって一つの解決策として、学習課題を実際の社会の現場に関わる課題として設定し、その課題を解決するための提案を学内で検討し、その成果を学外へアピールする機会を設けるという取組、すなわち社会連携型プロジェクト学習の導入が考えられよう。

プロジェクト学習（PBL: Project-Based Learning）とは、プロジェクトの教育力を生かした学生主体の学習形態を意味し、「一定期間内に、一定の目標を実現するために、自律的・主体的に、学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、他者と協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び」と定義される（同志社大学，2009）。特に社会連携型プロジェクト学習では、現代社会の抱える課題を発見し、その解決をはかるために学習者が自律的に活動を通して学ぶ

ため、多くの実践報告では、自発的・行動的な学生の情熱と意欲を誘発する、学生主体の新しい学習形態であるとされる。

実社会で学び、社会へその学びの成果を還元することにより、また次の新たな学びがうまれる。このような一連のサイクルを何度も繰り返すことで、自ら学ぶ・行動する力が育てられる。ひいては、社会で生き抜くための総合的な社会人基礎力を身に付けることにつながるであろう。

Ⅶ 引用文献

- 安藤香織・田所真生子 2002 実践！ アカデミック・ディベート 批判的思考力を鍛える ナカニシヤ出版
- Buzan, T., & Buzan, B. 1993 The mind map book. BBC Books. 田中孝顕（訳）2000 人生に奇跡を起こすノート術 きこ書房
- 同志社大学 2009 Project based learning 自ら学ぶ育てる行動する 同志社大学教育支援機構
- Doyle, M., & Straus, D. 1976 How to make meetings work! CA: Berrett-Koehler. 斎藤聖美（訳）2003 会議が絶対うまくいく法 日本経済新聞社
- 藤田哲也 2002a 京都光華女子大学における導入教育：「大学基礎講座」 京都大学高等教育研究 第8号 131-147
- 藤田哲也 2002b 大学基礎講座の授業運営に関する検討 京都光華女子大学研究紀要 第40号 39-64
- 藤田哲也（編）2006 大学基礎講座— 充実した大学生活をおくるために— 改増版 北大路書房
- 樋口裕子 2003 みんなのディベート授業 日本文教出版
- 星野欣生 2002 人間関係づくりトレーニング 金子書房
- 伊藤美加 2004 大学基礎講座の授業運営に関する検討Ⅱ 京都光華女子大学研究紀要 第42号 75-92
- 伊藤美加 2005 大学基礎講座の授業運営に関する検討Ⅲ 京都光華女子大学研究紀要 第43号 67-83
- 伊藤美加 2007 大学基礎講座の授業運営に関する検討Ⅳ 京都光華女子大学研究紀要, 第45号, 107-125.

- 國分康孝 1996 エンカウンターで学級が変わる 中学校編 図書文化
- 杉江修治 2011 協同学習入門：基本の理解と51の工夫 ナカニシヤ出版
- 諏訪茂樹 2000 人と組織を育てるコミュニケーショントレーニング 日本経団連出版

Appendix 1. 前期「コミュニケーション演習Ⅰ」受講生の声

< A クラス >

- ・最初に班を決めた時には全員が初めて会った人だったので、うまくやっていけるか心配だったりしましたが、班での話し合いなどをしていくうちに、そういった心配も自然となくなっていきました。また話し合いの中で、それぞれの意見などにお互いの個性がでており、自分ひとりのときにはでなかったであろう考えなどがでてきて、新しい発見などもありました。また班でレジュメを作ったときには、それぞれ分担して調べ物などをしたので、相手との協力についても学ぶことができました。
- ・コミュニケーション演習の授業が始まった時には、慣れない環境で、初めて会う人と活動することは難しかったですが、今となると楽しかったです。一人の取組では他者の意見は聞けませんが、班ですると、いろいろと話し合いながら進められたので、学ぶこともたくさんありました。これからは今回学んだ相手のことを考えて行動することを忘れず、頑張っていきたいです。
- ・はじめはなじめるか不安で、無事に発表が終えられるか不安でしたが、話し合いをしていくうちに意見がまとまったりどんどん楽しくなっていくのを見てください。すごくよい機会だったと思いました。意見を言い合うことは元々苦手だったので、発表が終わったとき、すごく変わったと思いました。

< B クラス >

- ・班でいろいろあったけど、楽しくできたのでよかったと思う。できたら班全員の5人で最後までやりたかったなあと思いました。最終的には3人になって

しまったけど、自分たちなりにがんばったと思います。

- ・調べまとめるまでは順調でしたが、発表がぼろぼろになってしまいました。みんなの発表を聞いて、京都を活性化させる方法はたくさんあるのだなと思いました。少し意外で驚いています。
- ・他の班の人とはかかわりなかったけど、他の学科に友達ができたのでよかった。もっと早くに準備を始める習慣をつける必要があると感じた。とりあえず、結果オーライということで、楽しかった。
- ・人見知りで全く知らない人としゃべることができなかったけど、少しだけ克服できたような気がしました。なんか、調べるのとかは難しかったけど、発表も成功したので、よかった。

< C クラス >

- ・学部の違う人が集まって活動するので、気の合わない人がいたらどうしようかなと思っていただけけど、班の人はみんな自分の意見をしっかりとってくれる人だったので、活動もスムーズに進んだと思います。コミュニケーション演習の時間はすごく充実した授業になったと思います。
- ・コミュニケーション演習の授業を受けて本当によかった。他人と協力し合いながら、一つの作品をつくりあげることの喜びを知ることができたのは、私にとって一番大きな成長だったと思う。また、人見知りの私が、こんなにも授業内の班で仲良くなることができたのも成長した証なのかなと思う。この授業を受けて自分が成長できたことは、このほかにもたくさんある。それを、これからの大学生活だけでなく、その先の生活にも生かしていきたいと思った。
- ・自分の考えを上手くまとめるのは大変だと感じました。それにたくさんの情報を重要どころだけピックアップして、相手に分かりやすく説明するのにも難しさを感じました。自分がわかっていても相手にそれがうまく伝わっているのかどうかというのが発表のときに重要だったけど、私はできなかったんで、

この授業で学んだことをいかして、これから気をつけていきたいと思いました。

- ・この半期の授業で、共同作業をするときに大切なことは何かなど、たくさんのことを学べた。自分の意見を明確にし、相手にしっかり伝えることで、相手の意見が自分と違ってても、それを受け入れることの大切さなど、いろいろ学ぶことができてよかった。

< D クラス >

- ・最初は早くみんなとなじもうと思っていなしたが、3～4回目の授業のあたりから、心が折れて、自分の意見を全く言えなくなってしまいました。それが、今でも悔しいです。自分から心を開かないと、相手は聞いてくれないのに…。でも班発表のときはとても仲良くできたと思います。役に立っていなかった私に、スライドをまかせてくれた班のみんなともっと仲良くなりたかったです。正直言うと、この授業がとても嫌で、何度も逃げようと思っていましたが、逃げなくて良かったです。この班で良かったです。
- ・初対面の人と話すのは難しいと感じていたけれども、グループ活動を続けていくうちに、しゃべることが増えていったので、何かを通してまとまって行動すると、自然とコミュニケーションはとれるのだなと気づきました。見た目で判断していないと思っていたけれど、実際は判断していたので、これからは気を付けようと思いました。見た目とのギャップが面白いとも感じることができ、良かったです。
- ・授業が始まったころは不安だったけれど、同じ班の子たちがとても優しく、安心して参加できた。班のメンバーは全員出身地も学科も違うけれど、この授業がきっかけで、お泊り会をしたり、パーティをしたり、楽しい思い出ができました！

< E クラス >

- ・全く知らない人とコミュニケーションをとるのが初めは少し心配だったけど、みんなで楽しく活動することができたのでよかったと思いました。
- ・初めて集まった時から思っていた以上にグループ内

の雰囲気も良く、話し合いもスムーズに行えました。ただ、発表準備のときは、うまく進まず、あせったり、楽しくできなかつたりもしました。あせるということは、それだけ真剣に向き合っていたからだとも思います。最終的には発表も無事に終えることができました。

- ・この授業で、他者と話すときは自分の意見を明確にしていかなければ、他の人に伝われないことを知りました。また、自分の意見だけを通すのではなく、他の人の意見も傾けて話さなければならないとも思いました。そして、話し合いは、自分の意見も大切ですが、他の人の意見も大切であると思いました。考え方は一人ひとり違っていて、こんな意見もあるんだと思いました。